広報市民リポーターだより ①

今回から新リポーター陣による取材記事をお送りします。

第一回目は、畠山リポーターが職業安定所を訪ね〝求職と求人〟について、伊藤リポーターは大館工業団地を訪ねて〝企業誘致の問題〟についてそれぞれ取材しました。

求人は求職を越えている

リポーター　畠山　智子（相染沢中岱）

県北の中核都市大館の人口減少は気になるところです。

地元には本当に仕事がないのでしょうか。就職の窓口である職業安定所を訪ねて、統括職業指導官の北條忠夫さんからいろいろお話を伺いました。

市内の求職状況をお尋ねしたところ、意外なことに有効求人倍率（求人数と求職数との割合）は一・〇八と求人の方が上回っているとのことです。思わず聞き返してしまいました。

しかし、男子の求職者のうち四七・九％、約半数は四十五歳以上の人で占められているそうで、この年齢層ですと当然家族を扶養できるほどの賃金を希望します。そのへんが求職、求人双方のジレンマなようです。一方女子の求職者で、同じく四十五歳以上の人が占める割合は三八・五％、男子と比べて希望は難しくないのですが、今度は年齢制限などで思うにまかせないようです。また、若年女子の三割強は事務職を希望していて、販売関係の仕事だと日曜、祝日に休めないなどの理由で敬遠されるなど、あらゆる面で平行線をたどっている感じがしました。

ここ数年企業誘致が相次ぐ中で、特に進出の多い縫製工場では「大半が高年齢の女子の採用による操業」とのことです。ファッション関係の職種などだけに若い人をたくさん求めているようですが、何か縫製工場のイメージにこだわりを持つ求職者が多いということには考えさせられました。決して仕事がないわけでなく、むしろこうした企業では人を求めているという状態にもかかわらず、それをまだ受け入れられない。〝大館人〟気質の一面を見た気がします。厚生施設も整え、伸び伸び働ける環境づくりの努力も見受けられるのに、いろんな「偏見の眼」が向けられていると感じるのは私だけでしょうか。

企業は労働者がいてこそ成り立ちます。私たちの周りにはいろいろな仕事がありますが、その一つ一つがうまく動き、生活に潤いが生まれてこそ街が栄えていくのではないでしょうか。みんなの暮らしが上向くにはどうしたらよいのか、今一度視点を変えて考えてみませんか。

職安で取材する畠山リポーター

誘致企業の拠点を訪ねて

リポーター　伊藤　正行（美園町）

市は地域経済活性化の方途として、積極的な企業誘致を展開しており、市民も大きな期待を寄せています。

私は、昭和五十六年五月に大館工業団地へ進出以来、男子型企業として地域に根ざし、着実に業績を伸ばしている㈱ニッショー大館工場を訪ね、関工場長、伊藤総務部長から現状と将来の展望について伺いました。

㈱ニッショーは、大阪に本社を置き、器材・ストア・医療の三事業部で形成されています。大館工場は医療事業部の主力として順調に発展してきました。

昨年同社は大阪証券取引所商業部二部上場入りを果たし、将来は大証一部、東証一部入り、一千億企業を目指しています。

大館工場の従業員総数は七百四十人（うち男子五百七十人）、その他外注先から百九十人、パート八十人を抱え、さらに現在新築中の製薬工場に二百五十人の採用を見込んでいるそうです。

「意欲」を社是として全社員に未来へ挑戦する姿勢を求めるとともに、高度なノウハウをもって人類の繁栄に奉仕するという大きな企業ポリシーを持っており、現在、器材事業部で培われたガラス加工の技術をもとに、医療器具の開発を推進、注射針、注射器のみならず輸液セット、人工透析器などの優れた品質は世界中の医学界から高い評価を得ています。また、バイオテクノロジーを駆使して、エイズやガンの克服を目指しているところにもこの企業のポリシーがうかがえるようです。

さて、誘致企業が進出してくるには、用地、電力、水資源等の環境要素、優れた人的（労働力）資源、租税等の優遇措置、この三つが必要条件になると思います。さらには誘致後に地域住民が積極的にフォローアップするなど、企業にとって魅力ある受け皿をつくることが急務と考えます。

受け皿が整備され、充実すれば進出企業は増えるでしょうし、将来、こうした企業の発展によって地元に還元されるものも増えるのではないかと思いながら、大館工業団地をあとにしました。

左から関工場長、伊藤総務部長、伊藤リポーター

◇広報市民リポーターだよりは、毎月1日号で、6人のリポーターが独自に取材した記事を掲載します。